

國學院大學學術情報リポジトリ

菅原道真「喜雨詩」と『漢書』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 波戸岡, 旭, Hatooka, Akira メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000225

菅原道真「喜雨詩」と『漢書』

波戸岡 旭

一、前言

菅原道真は、貞観九年（八六七）、二十三歳の春に、文章得業生に補され、正六位下の位階を授かり、下野権小掾という遥授の外官に任ぜられた。

この頃、道真は（25）「喜雨詩」と題する五言排律の詩を詠んでいる。

貞観九年という年は、陸奥国の大震災（貞観十一年（八六九）五月二十六日）の二年前である。『三代実録』によれば、

遡つて貞観七年の頃から、おそらくその大地震の前兆ともいふべき地震が頻繁に京の都をはじめ諸国に生じており、加えて大早魃と長雨との繰り返しによって、飢餓と疫病の流行に苦しんでいた時代である。

すなわち貞観八年は四月・五月と霖雨なみどが続き、その後は逆に「天下大いに早して、民の飢餓するもの多かりき」（六月二十八日の条）とあり、七月十六日の条には、「五畿七道をして、幣みでいを国内の諸神に頒わかち、金剛般若経を転読せしめき」とあるのははじめとして諸国の神仏に請雨祈願をしている。しかし、なお飢饉は深刻を極めてゆき、貞観九年二月十七日の条には、

「六十の僧を紫宸殿に延き、限るに三日を以てして大般若経を転読せしめき。去年の災旱を承けて、京邑飢乏^{けいひ}。詔して米三百廿石、粳二千石。塩卅五斛、新錢一百貫を以て、東西の京の乏絶^{とほ}しき人を賑恤^{しんじゆ}し給ひき」とある。

道真のこの「喜雨」の詩が詠まれた月日は正確には分からないが、『三代実録』の貞観九年四月二十日の条に「廿日己丑、大いに雨ふりき」とあり、二日後「廿二辛卯、東西の京に始めて常平所を置き、官米を出して糶^うらしめき。米一升の直、新錢八文也。京邑の人、来たり買ふ者、雲の如くなりき。」とある記事が、この詩の詠まれた日に最も近いであろう。

前年より続く大旱魃の都におりしも雨が降ったので、遥任とはいえ初めて官途に就いた道真は、新進官僚としての気概を込めて、その慈雨を喜び、豊作の秋を予祝するという主旨の「喜雨詩」を詠んだのであった。

なお、この詩の題注には、「龍を以て韻と為す。八十字を限る。句毎に漢代の良吏の名を用ゐる」とあるように、詩の毎句に漢代の良吏の「名」を折り込んでいる。八韻の排律の詩であるから十六人の官吏名を連ねている。

詩に物名を折り込むのは、詩作上の修辞技巧のひとつであるが、漢代の良吏の名を用いたのは、『漢書』『後漢書』を家学と

する菅原道真ならでのことであり、文章得業生道真の熟達した学識と豊かな詩才が見て取れる力作である。言うまでもなくこの十六名の良吏は、みな智・信・仁・勇・嚴などの徳を備え、激越な逆境にめげず、壮大な気概をもって信義忠誠を貫いた稀代の良吏たちであった。すなわち、この「喜雨詩」は、「喜雨」の詩題を詠むとともに、中国の聖代漢王朝の良吏名を折り込む詠法を用いて、彼ら良吏を理想的官人と称賛し、道真みずからも彼らを目標とするという矜持を、それとなく表明していると思われる。

二、喜雨詩と『漢書』——その詩の主題——

以下に、「喜雨詩」を掲げ、併せて、各詩句の漢代の良吏名とその典拠の『漢書』巻数及び関連する『蒙求』の「表題」とを記す。

(25) 喜雨詩 以龍為韻。限八十字。毎句用漢代良吏名。

雨を喜ぶ詩 龍を以て韻と為す。八十字を限る。句毎に漢代の良吏の名を用ゐる。

『漢書』列伝

博号霑千里 弓を博くして千里を霑し

宣恩出九重 恩を宣べて九重より出づ

雨寛何霑沢 雨寛にして何ぞ霑沢なる

雲黯幾奇峯 雲黯くして幾ばくの奇峯ぞ

暗記年豊瑞 暗に記す年豊の瑞を

先知井邑雍 先づ知る井邑の雍きを

令辰成徳政 令辰徳政を成さば

旁午育耕農 旁午耕農を育まむ

歩武甘膏滿 歩武甘膏として滿ち

含弘渙汗濃 含弘渙汗として濃し

延年秋可待 延年秋 待つべく

広漢霽猶慵 広漢霽ること猶ほ慵し

欲遂聽銅雀 遂に銅雀を聴かんと欲す

誰尊醮土龍 誰か土龍を醮るを尊ばん

田翁婦去処 田翁 婦り去る処

佇立盛時邕 佇立して時邕を盛す

・印の句の人物は『蒙求』所載。その標題は、左記のとおりである。

「朱博鳥集」「汲黯開倉」「葛豊刺拳」「蕭朱結綬」「何武去思」「漢相東閣」「広漢鈞距」「龔遂勸農」「王尊叱駭」

【口語訳】

慈雨は、九重の高い空から大きな音をたてて、千里の彼方まで降り、大地を隈なく湿らせる。

広く豊かに降る雨は、この上なくありがたい恵みであり、黒々とした雨雲は、無数の奇峯のようである。

この雨は豊年の瑞祥であり、村々は平穩になるにちがいない。

この良き年、善政を行なえば、しとどに降るこの慈雨が、農耕を育むであろう。

ほんの少しのすき間もなく、慈雨は満ちわたり、広大な大地を、どこまでも濃やかに濡らしている。

気長に豊年の秋を待てばよく、
〈この雨が止んで〉 大空が晴れ上がることは気が進まない。

どうか豊年のしるしの銅雀が鳴るのを聞きたいものだ。
雨乞いのための土龍を祀ることなどはまったく不要である。

老農夫が田んぼから帰るとき、
畦に行んで世の太平をよろこぶ。

詩形は、五言排律で、掉尾の十五・十六句以外はすべて対句

仕立である。毎句に用いている漢代の良吏名からの一字乃至二字は、それぞれの対句内の対比する位置に措かれている。ただしそれは、ただその文字の本来の語義を使っているだけであって、個々の良吏たちの功績や故事などに関連させようとした表現はまったく見られない。

詩の内容は、本降りとなった雨を秋の豊作の瑞兆の慈雨であると喜び、今のこの聖代にこそ官僚として善政を施し、農民と共に泰平の世の繁栄を寿ぎたいというものである。

詩の構造は、前段・後段八句ずつの二段構成とみることができ。詩中に下線で示したとおり、前段のはじめの四句と後段のはじめの二句とに雨天の時空と降雨の様子を感覚的且つ能動的に描述する。そして、その慈雨の描述に続けて、雨は豊年の瑞兆と説くのであるが、それは「徳政」とか「育耕農」とかの語が示すとおり、道真自身の官僚的・為政者の立場から見たものであることは言うまでもない。

後半八句中には、豊作にちなむ「銅雀」の故事及び祈雨行事の祭具の一つ「土籠」の典故を用いている。「銅雀」の故事は、『三輔黄圖』に「古歌に云はく、長安城の西に双闕有り、上に双べる銅雀有り。一喝すれば、五穀成り、再喝すれば熟すと言う」とあり、また唐の劉禹錫の詩にも「長安に銅雀鳴れば 秋

稼雲と共に平らかなり」とある。また、祈雨行事の祭具の一つである「土籠」は、『淮南子』「説山訓」に「土籠を為りて、以て雨ふるを求む」とあるのに拠る。そして、白居易の「賀雨」詩に見える「時邕」の語を詩の最後尾に用いている。

詩の結びは、自身の感懐を直截に述べるのではなく、「田翁帰り去る処 佇立して 時邕を盛す」と、豊年泰平の世を欲ぶ老農夫を描いて印象的である。農耕社会を司る官吏としての心構えと、四民の喜び、農民の喜びを共に悦ぶところにこの詩の特長があると言えるであろう。ちなみに、白楽天の「賀雨」詩は、五言の古調詩の三十二韻という長篇で、翰林学士という立場から憲宗皇帝の修省し徳政を施したことのお蔭によって雨が降り豊年となったことを詠み、皇帝の善政を慶賀し、さらなる善政を維持してもらいたいという諷諭を込めた主旨のものであって、道真のこの「喜雨詩」は、白楽天の「賀雨」詩からの直接の影響は享けていない。

なお、四月二十日以降は、しばしば大雨・雷雨・洪水などがあり、四月二十八日・五月四日・五月二十九日・八月三十日・九月十四日の条にその記事が載る。けれども、この年十一月十三日の条には、「今秋、頗る年有りたり」との記事が載っている。

三、菅家と『漢書』『後漢書』

ところで、先にも述べたように、紀伝道の学の領袖である菅家において三史(『史記』『漢書』『後漢書』)は、家学と称すべきものであった。

それについて、道真是、二十歳の時、すなわち貞観六年(八六四)八月に、「八月十五夜、嚴閣尚書、授後漢書畢。各詠史、得黃憲(八月十五夜、嚴閣尚書、後漢書を授け畢んぬ。各史を詠じて、黄憲を得たり)」という詩序と七言律詩とを表わしている。その詩序に、以下に見ることく道真自身の史書に関する見解を披歴している。

この詩序および律詩は、父是善が、天安元年(八五七)二月に、御書所において紀伝道の学生たちに対して『後漢書』を講義し始めて、七年後のこの年に講義し終えた。その「竟宴」の時に作られたものである。道真是、この二年前にすでに文章生に及第しており、受講生を代表して「詩序」を著わしたのであらう。

以下は「詩序」からの抜粋である。

——(前略)——

堯舜盛んなれば、尚書に隆平の典あり。
周道衰ふれば、春秋に乱を撥とらむる法あり。
司馬遷が史記を修めて、君の挙遺ひきぞとることなし。
班孟堅が漢書を就なして、国の終終に建つ。

——(中略)——

順陽の范蔚宗、紀伝を修めて日月を繋ぎ、
巨唐の太子賢、注解を通じて膏育を振ふ。
南陽の故事、百代と雖も知るべく、
東觀の群言、一時の茂典と成せり。
易に曰く、人文を觀て、天下を化成すといふは、文の謂なり、と。

嚴君斯文の直筆を知り、斯文の良史なるを味はひ、
遂に諸もろの生を引きて、芸閣に校授す。

蓋し仲尼閑居して、曾子侍坐す。道を思ふ事、古より存す。

——(下略)——

(9) 八月十五夜、嚴閣尚書、授後漢書畢。各詠史、得黃憲

——(前略)——

堯舜盛矣、尚書者隆平之典。

周道衰焉、春秋者撥亂之法。
司馬遷之修史記、君奉無遺。
班孟堅之就漢書、國終終建。

——(中略)——

順陽范蔚宗、修紀伝而繫日月、
巨唐太子賢、通注解以振膏肓。

南陽故事、雖百代而可知、
東觀群言、成一時之茂典。

易曰、觀乎人文、以化成天下者、文之謂哉。

嚴君知斯文之直筆、味斯文之良史、

遂引諸生、校授芸閣。

蓋仲尼閑居、曾子侍坐。思道之事、自古存。

——(下略)——

【口語訳】

堯帝舜帝の聖代は、『尚書』というに隆盛の文典があり、
周王室が衰えると、『春秋』という乱を治める規範がある。

司馬遷が『史記』を撰述して、代々の帝王の言動が残ら
ず記され、班固が『漢書』を撰述して、国家を統治する大
綱を確立した。

——(中略)——

范曄が、紀伝を修めて、年月日の次第に編次し（『後漢
書』）、唐の章懐太子賢は、諸儒と『後漢書』を注解して、
奥義の難義を解明した。

（この書によって）後漢の歴史は、百代経つても知るこ
とができることとなり、『東觀漢記』（『後漢書』の別称）

は、一代の大典となった。

『易経』「象」に曰く、「人の世の文化を觀て、天下を治
めるといふのは、このような書物をいふのである」と。

嚴父是善は、この『後漢書』の記述が嚴正であり、すぐ
れた歴史書であることを深く認識して、そこで、紀伝の学
生たちを招集して、御書所において、校定し講義したので

あった。

そもそも孔子が閑居していたとき、曾子は侍坐して、先
王の道について教わり、孝は徳の根源であることを教わつ

た。そのように師に侍坐して人の世の道を深慮すること
は、いにしえより行われていたことである。

——(下略)——

右のように、『尚書』『春秋』『史記』『漢書』それぞれの史書
の特質と、およびとりわけ『後漢書』が優れた史書であること

を、簡潔に解き明かしている。

なお、『菅家文章』には、(63)「漢書竟宴、詠史得、司馬遷」(貞観十三年(八七二)二十七歳)、(91)「後漢書竟宴、各詠史、得光武」(元慶五年(八八二)三十七歳)が載る。更に、概して道真詩には、三史を典拠とする語彙の多いことは言うまでもない。

四、讃岐守時代の「祭城山神文」と「喜雨」詩

道真の「喜雨」詩は、他に『菅家文章』中にもう一首ある。

仁和四年(八八八)、道真四十四歳の時の作である。讃岐守三年目の年にあたるが、当時、任国讃岐の早魃に悩まされ、「今茲春より雨ふらず、夏に入りて雲なし。池底に塵生じ、蓮根氣死す。天と人と失ち、心と事と違ふ。仏力の至らずに非ず。蓋し人心の信あらざるならん。聊か文章を叙して、便ち嗟嘆す」(「国分蓮池の詩」題文)と憂慮する文を叙し、七言排律二十四韻の長篇の詩を詠んで、国内二十八寺に修法して仏恩を請うており、さらに、五月六日、官衙の西側の城山山麓の城山神社において、祭文(「祭城山神文」)を書き雨乞いの祈願をしている。

その「祭城山神文」の全文とその構成は、以下のとおりである。

① 祈禱の年月日・祭主

維れ仁和四年、歳戊申に次る。五月癸巳朔、六日戊戌、守正五位下菅原朝臣某、酒果香幣を以て、敬つて城山の神を祭る。

② 国内早魃の惨状の叙述

四月以降、旬に渡渉りて雨少なく、吏民の困しみ、苗種も田す。

③ 祈雨の呪事効無く、悲憤

某、忽ちに三亀解き、試みに五馬親ぶ。憂を分かつたんこと任在り、憤を結ぶこと惟れ悲し。嗟嘆、命の數奇、此の愆序に逢へり。

④ 国守としての不徳を慨嘆、自省・自戒の意を込める。

政の良からずして、感(神仏の感応)の徹ることなきか。

⑤ 神霊の讚美

伏して惟れば、境内山多くして、茲の山のみ独り峻し。城中数社にして、茲の社尤も靈あり。

⑥ 祈祷の意図

是に吉日良辰を用て、禱り請ひ昭らかに告ぐ。誠の至りなり。神其れつまびらかに 祭まつり せよ。

⑦ 祈願成就の場合の神への奉礼

八十九郷、二十万口の若き、一郷も損する無く、一口も愁ふること无からませば、敢て蘋藻清明にし、玉幣重畳して、以て応驗に賽して、以て威稜を飾らざらんや。

⑧ 祈願不成就の場合の神への威嚇

若し甘澍饒あまかならず、旱雲結ばるる如くあらませば、神の霊、見る所無く、人の望遂に從はざらん。斯れ乃ち神をして光り无からしめ、人をして怨み有らしむるなり。人神共に失ひて、礼祭或は疎おろそかになりなん。

⑨ 祈祷の結び

神、其れ裁しられ。尚こひはくは饗うけよ。

この祭文は、百十五字ほどの短文であるが、神をなだめたり、威嚇したりして冥助を請う発想は、『詩経』「雲漢」以来の古代中国の禱祝文にみえる典型的な発想に拠るものだが、国守として、不運に遭遇する不幸を嘆き、己の政治の悪しきゆえかと問ひかけ、城山神の靈威を称揚し、祈願成就の場合の奉礼の

誓約をし、最後に神靈を威嚇して祈願成就を懇願するのである。国守として「讀岐国全郷全戸全人の愁いを祓いたまえ」と祈願する。この祭文は、すべて簡潔にして周到な配慮がなされており、過剰な修辭表現も贅文もない、本格の構造による祈願の祭文である。

この五月六日の祈祷のあと、翌六月に入つて長雨があつた。そこで、道真は次の「喜雨」の詩を詠んだのであつた。

(295) 喜雨

雨を喜ぶ

田夫何因賀使君 田夫何に因りてか使君を賀す

陰霖六月未前聞 陰霖六月未だ前に聞かず

満衛僚吏雖多俸 満衛の僚吏俸多しと雖も

不若東風一片雲 若かず東風一片の雲には

【口語訳】

農夫たちはなんのために国守の私を祝ってくれるのか。

いまだかつて六月にこんなに長雨が降つたことはなかつたからである。

国府中の役人たちの俸給が上がるのもうれいだろうが、それよりも、東風が吹いてひとひらの雲が湧いて、このように雨をもたらず喜びにまさるものはない。

国司と農民との間においては「信」の徳が最も大切であつて、この詩にも道真の農民への思いやり、農事への強い関心ぶりが窺える。なお、転句の「国府中の役人たちの俸給があがるのもうれしきだろが」の句意は、豊作を予祝する軽快な心持ちから出た、いささか軽口のユーモアであり、「俸給」の語を持ち出して詠むところ、ここにも白居易詩の影響が読みとれる。

五、結語

以上、菅原道真の喜雨詩二首を巡って、少壮官僚時代と讃岐守時代の道真の官僚としての気概と心情とを考察し、併せて紀伝道の学の根幹である史書熟達の道真像を垣間見ようと試みた。特に、(25)「喜雨詩」は、新進官僚としての菅原道真の、意気軒昂たる気概のこもった作であり、(29)の詩もともに自戒の意をも込めた諷諭性に富む詩であると言えるのである。なお、ちなみに、平安朝官人たちの詩における諷諭性というものは、左拾遺時代の白居易のような他者に向けた政治批判・社会批判を旨とするよりも、むしろ自戒・自省を込めた表現のなか

に、他者に対しても自覚を促すという姿勢が読みとれるものが多いのである。

注

- 拙稿「讃岐守時代の道真——讃州の客意は道を失へるを述べたるなり——」
 (二宮廷詩人 菅原道真)。
 拙稿「菅原道真「讃州客中詩」——「行春詞」を中心に——」(奈良・平安朝漢詩文と中国文学)。